

宮本正太郎と旧制姫路高等学校

吉岡克己・本岡慧子

〈姫路科学館 〒671-2222 兵庫県姫路市青山 1470 番地 15〉

e-mail: katsuki_yoshioka@city.himeji.lg.jp



吉岡



本岡

京都大学花山天文台第3代台長で京都大学名誉教授の宮本正太郎（1912-1992）は、1930年（昭和5年）に旧制姫路高等学校に入学し、3年間の学生生活を兵庫県姫路市において過ごした。本稿では、姫路科学館開館25周年記念特別展「科学実験の今むかし—旧制姫路高等学校物理実験機器コレクションから—（2018.4.28-5.27）」開催に向けて調査した資料をもとに、これまであまり知られていなかった京都帝国大学理学部宇宙物理学科に入学するまでの宮本正太郎について、特にアマチュア天文家としての活動に注目して紹介する。

1. はじめに

宮本正太郎（敬称略、以下「宮本」という。）は1912(大正元)年12月1日、広島県尾道市に米穀商の長男として誕生した¹⁾⁻²⁾。第三尾道尋常小学校（現尾道市立長江小学校）、広島第二中学校（現広島県立観音高等学校）を経て、1930(昭和5)年に姫路高等学校（現神戸大学、以下「旧制姫高」という。）第七回生として理科甲類に入学する。旧制姫高卒業後、1933(昭和8)年に京都帝国大学理学部宇宙物理学科に入学し、研究者としての生活をスタートすることになる。

宮本は、1948(昭和23)年に35歳で京都大学理学部教授となり、1958(昭和33)年に第3代花山天文台長に就任すると1976(昭和51)年の京都大学退官までその職にあった。在任中、国際月面学会会長（1958-1966年）、国際惑星地質学会副会長（1967年）、日本天文学会理事長（1969-1971年）を務め、1976(昭和51)年に紫綬褒章を、1983(昭和58)年に勲三等旭日中綬章を受勲している。

宮本の業績については、「宮本正太郎論文集」¹⁾に詳しいが、特に火星の重要な観測研究により2007(平成19)年に火星クレータの一つが

Miyamotoと命名された。火星の研究は詳細なスケッチを基にしているが、天体のスケッチは一朝一夕に習得できるものではなく、それ以前に十分な経験を積んでいたことは想像に難くない。

また、宮本は天文学の啓発活動にも熱心で、著書は50冊に及ぶ²⁾。これらは、アマチュア天文家であった宮本自身の経験によるところが大きいと考える。しかし、宮本の研究者としての活動以前、特に京都帝国大学入学直前の旧制姫高時代の学生生活については、系統的な研究は知られていなかった。

2. 宮本正太郎と星との出会い

宮本と星との出会いは尋常小学校時代に遡る。夏休みには愛媛県今治市の祖父宅に長期滞在するのが常であった。宮本の長女由紀子によると、その行き帰りの連絡船から見上げた夜空が星との出会いであった。そして、第三尾道尋常小学校卒業時には旧制中学校受験に備えた口頭試問の練習で、宮本の3、4、6年の受時訓導（担任教諭）であった河野哲三の「将来何を志しますか。」という質問に「必ず天文学者になります。」と答えている²⁾。

宮本は旧制広島第二中学校に1925(大正14)年



写真1 中学時代の宮本と天体望遠鏡。
尾道の自宅物干し台（個人蔵）。



写真2 旧制姫高本館（ゆりの木会館）。



写真3 旧制姫高同窓生銘板
（兵庫県立大学姫路環境人間キャンパス）。

に入学した。中学時代には祖父より天体望遠鏡を贈られている。宮本の小、中学校時代の同級生橋本達吉が「星月夜」への寄稿文に記す天体望遠鏡がこれであろう（橋本は8インチと記しているが8センチの間違いと考えられる。）これが写真1の望遠鏡ではないかと推測される。また、反射望遠鏡も使用していたようである。さらに、宮本によると中学時代にすでに京都帝国大学の山本一清（以下「山本」という。）の指導を受けていた²⁾とのことであるが、どのようなきっかけで、どのような指導を受けていたのかは不明である。

「昭和五年度履歴書綴」によると、宮本は旧制広島第二中学校を5年間で卒業している。旧制中学校は5年制であるが、多くの旧制高等学校進学者が4年で修了したことを考えると、中学校在学時には旧制高等学校さらには帝国大学への進学に迷いがあったのではないかと推測される。

宮本は中学卒業時に旧制姫高以外に徳島高等工業学校（現徳島大学工学部）も受験しており、このことも、先の推測を肯定するものとする。

3. 旧制姫路高等学校

旧制姫高は1923(大正12)年に兵庫県姫路市に

全国25の官立旧制高等学校で最後に設置された学校である。そして、戦後の学制改革の中で独立した新制大学への移行を断念し、1947年当初は京都大学との合併で話は進んでいたがGHQの指示で越県での分校設置が認められず、1949(昭和24)年に神戸大学姫路分校として再スタートすることとなった³⁾。

その後、神戸大学が現在の六甲台キャンパスに敷地を集約するにあたり、1964(昭和39)年に神戸大学姫路分校の敷地、建物を兵庫県に売却している。このため、旧制姫高の跡地は兵庫県立大学姫路環境人間キャンパスとなり、その中に旧制姫高の本館の一部と講堂が現存している(写真2)。現在、講堂前には同窓生銘板が建てられ全卒業生

の氏名が刻まれている。この中に宮本の名前も見られる（写真3）。

4. 宮本正太郎と旧制姫路高等学校

前章で述べたとおり，神戸大学は旧制姫高を前身校としているが，その建物等は継承していない。一方，兵庫県立大学が所管する旧制姫高本館（ゆりの木会館）には，旧制姫路高校同窓会資料室が設けられ，卒業生の資料の一部が保管されている。

兵庫県立大学，神戸大学等が管理するこれらの資料から，宮本の姫路での学生生活を断片的ではあるが知ることができる。

4.1 姫路での住居

宮本は1930(昭和5)年，旧制姫高理科甲類に第七回生として入学する。「昭和五年度学籍簿」によると4月10日に学年假総代に任命されており優秀な成績で入学したことがうかがわれる。多くの学生が寄宿舎（白陵寮）に入るなか，「旧制姫路高等学校創立四十周年記念同窓会報」によると宮本は姫路城の西約1 kmの姫路市柿山伏仲の町（表記は宮本の記述のまま）の吉川家に下宿していた。寄宿舎の近すぎる人間関係を嫌ったのかもしれない。

現在の柿山伏は番地表示のみとなっているが，中之町自治会が現存しており，平成19年版のゼンリン住宅地図にある吉川あさ宅が下宿地ではないかと考えられる。周辺は戦災を受けておらず，路地などは当時のままと思われるが，残念ながら住宅等には当時の面影を見ることはできない。

4.2 天草卯との交流

天草卯（以下「天草」という。）は，「職員進退及身分 自昭和三年至昭和六年」によると1928(昭和3)年に東京帝国大学理学部数学科を卒業後，旧制姫高の数学講師として着任し，同年10月に教授に任じられた。

宮本は旧制姫高では数学に高い関心を示し，天草に高校卒業程度の参考書の推薦を乞うている。

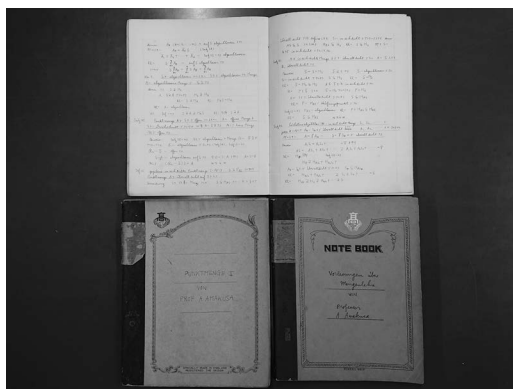


写真4 旧制姫高時代の数学ノート（1930-1931頃：個人蔵）。表紙に校章と amakusa の文字が見られる。



写真5 宮本自宅前での天草（1970年頃？：個人蔵）。

さらに，二年生のときにはドイツ語の函数論の本を天草指導の下で独習している²⁾。宮本が保管していた旧制姫高のノート4冊のうち3冊が天草と学んだ数学のノートであることから，宮本にとっても大切な思い出であったことがうかがわれる（写真4）。また，天草との交流は後年まで続いている（写真5）。

4.3 京都帝国大学への進学

長女由紀子によると，宮本は天草の影響で天草の出身校である東京帝国大学に進学し数学を学ぶことを考えていた。しかし，高校3年生の夏に京

都帝国大学花山天文台で天体観望をする機会を得て天文の道に進んだ。

これにはいくつかのエピソードがある。宮本によると中学の頃から山本の指導を受け、山本の「命令」で京都帝国大学の天文学科に進んだという²⁾。また、宮本が京都帝国大学に進学するにあたっては、山本が尾道市の宮本の実家に出向き「彼を帝大教授にするので京都帝大に進学させて欲しい。」と宮本の母民代に話したという。

いずれにしても、宮本が京都帝国大学に進学し、天文学者への道を歩むにあたって、山本の存在は欠かせないものであった。

4.4 旧制姫路高等学校での天文活動

尋常小学校の少年時代より星空に親しみ、旧制中学、高等学校時代の天文活動が山本の目に留まるほど熱心なアマチュア天文家であった宮本であるが、具体的な天文活動の内容については明らかではなかった。今回、宮本と旧制姫高について調査する中で、宮本の旧制姫高時代の天文活動がある程度明らかになった。

宮本は旧制中学時代には天文部で活動していたが、旧制姫高には天文部は存在していない。しかし、1931年の卒業アルバムから宮本在学時に「化学の会」があったことがわかっている。これは、同好会のようなものではないかと推測されるが、その写真に反射望遠鏡が写っている（写真6）。後に述べる宮本の1933年の観測日誌に11 cm反射望遠鏡での惑星スケッチが多数残っており、この写真の望遠鏡が宮本の使用した望遠鏡ではないかと推測される。

さらに、この反射望遠鏡については、「旧制姫路高等学校物理実験機器リスト（原簿）」に記載がなく、1937(昭和12)年に口径98 mmの屈折望遠鏡を購入していることから、写真6に写る反射望遠鏡が中学時代に宮本が入手した宮本個人の反射望遠鏡ではないかと想像される。

実際に宮本が旧制姫高時代に取り組んだ天文活動は、今回、宮本家から発見されたノート「Mars



写真6 旧制姫高「化学の会」（兵庫県立大学蔵）。

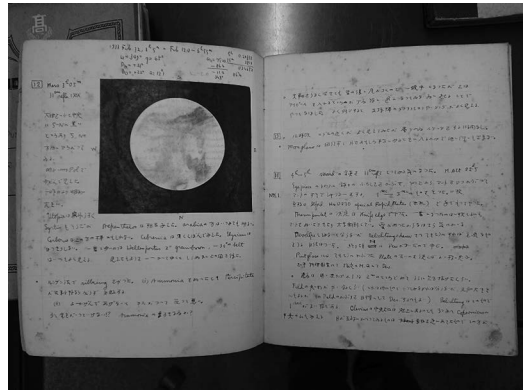


写真7 天体観測日誌1933I（個人蔵）。

u. Jupiter Diary of Observation General 1933I」に詳しい（写真7）。この観測日誌は、1933年1月1日から5月23日までのもので、火星26枚、木星13枚、土星5枚のスケッチが含まれている。宮本が使用した望遠鏡は、8 cm屈折望遠鏡、11 cm反射望遠鏡、15 cm反射望遠鏡と花山天文台のクック30 cm屈折望遠鏡等である。特に、旧制姫高を卒業した4月以降はクック望遠鏡を多く用いて観測している。

1933年は火星小接近の年であり、シーイングが悪いであろう時期に小型望遠鏡によってしっかりと北極冠や表面の模様を観察したことがノートに残るスケッチからわかる。

京都大学総合博物館が所蔵する、後に火星気象学を拓いた1956(昭和31)年以降のスケッチに比

べると精細さには欠けるが、それらのスケッチ観測につながる貴重な証拠である。

5. ま と め

宮本が姫路で過ごした期間は3年間と短い、学生生活については兵庫県立大学が管理する旧制姫路高校同窓会資料室の資料から多くの発見があった。また、旧制姫高を前身校とする神戸大学大学文書史料室からは、宮本の学籍簿など公的な記録を閲覧することができた。さらに、貴重な個人資料については、宮本の自宅に保管された中に見出すことができた。特に天体観測日誌(写真7)には宮本のアマチュア天文家としての活動に関する多くの情報が詰め込まれており、さらに研究に値する資料である。

宮本は姫路城にすら足を運ぶことなく姫路での生活を終えているが、今回の調査で下宿場所が特定できたことは、宮本の姫路での生活につながる重要な発見であった。

6. おわりに

宮本の天文学者としての業績については、「宮本正太郎論文集」等¹⁾⁻²⁾に詳しく、また、天文教育普及活動についても、その著書などからうかがい知ることができる。しかし、特に研究活動を始めるまでの生活を語る資料を得ることは時間が経つと極めて困難となる。

科学も人間が作ったものである以上、宮本に限らず科学者の人柄や生活を示す資料を継承することは重要であると考え。しかし、同窓会や個人が保管している資料については、必ずしも将来にわたる継承が担保されているものではなく、散逸、紛失を防ぐことがこれからの課題となろう。

本稿が宮本の実像を伝える一つのヒントになれば幸いである。

謝 辞

本調査にあたり、京都大学大学院理学研究科附属天文台、神戸大学大学文書史料室および兵庫県立大学に多くの協力をいただいた。また、生前の宮本を知る多くの方からさまざまなお話を聞くことができた。何より宮本の長女由紀子氏には貴重な遺品を提供いただき、多くのお話をうかがうことができた。ささやかではあるが感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) 宮本正太郎, 1993, 宮本正太郎論文集(京都コンピュータ学院 発行)
- 2) 宮本周子, 1993, 星月夜 宮本正太郎追悼記(みぎわ書房)
- 3) 神戸大学百年史編集委員会 編, 2002, 神戸大学百年史通史I(神戸大学 発行)

Prof. Shotaro Miyamoto's Life in Himeji Government High School
Katsuki YOSHIOKA and Keiko MOTOOKA
Himeji City Science Museum, Aoyama, Himeji, Hyogo 671-2222, Japan

Abstract: Prof. Miyamoto was a student of Himeji government high school under the old system of education before entering Kyoto Imperial University. His life and activity as an amateur astronomer have not yet been well known. We would like to introduce his life and activity of his teenage years.